

人間性心理学の源流に関する一考察

A Study on the Roots of Humanistic Psychology

高橋 勇一

Yuichi Takahashi

**Abstract**

本稿では、人間性に対する理解を深め、その回復と成長に寄与してきた人間性心理学の源流について考察することを試みた。その現代における源流は、マズロー心理学となり、五段階欲求説や自己実現論などが重要な理論となり、健康的な側面に焦点をあてている。心理学の歴史は短く、過去は長いといわれるように、人間性心理学の源流をさらに遡ると、それは古代ギリシャ哲学およびヘブライズムと考えられている。確かに、プラトン哲学の中には、人間の本性・徳性・卓越性に関する対話があり、健康と正義の議論は、現代の健康概念に通じる内容がある。私たちは、学問の起源や源流からの歴史的遺産を踏まえて、新しい知見を積み重ね、未来を構築していく必要があるといえる。

キーワード：人間性心理学、源流、マズロー心理学、古代ギリシャ哲学、健康と正義

**I はじめに**

現在、我が国は「Society5.0」の社会の実現を目指している。それは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」<sup>1)</sup>を意味する。「人間中心の社会」という表現が気になるところだが、それは、人間がAI（人工知能）やロボットに支配されるものではないと解釈されている。そして、むしろ人間性を回復し、人間らしい社会の理想を追求することであると考へたい。人間性理想の実現は、不変的かつ普遍的な課題であり、人間性を対象とする心理学の分野でも研究されてきている。現代の社会は、歴史的な遺産や先人たちの探究の土台の上に築かれてきている。そこで、本論では、人間性に対する理解を深め、その回復と成長に貢献するために研究されてきた人間性心理学の源流について考察することを試みた。

**II 人間性心理学とは**

人間性心理学は、「人間を無意識に支配されるとする精神分析や、外的環境に支配されるとする行動主義に対して、人間を自由意志をもつ主体的な存在として捉える立場」であり、「マズローは、

これを、精神分析と行動主義の二大勢力に対して第三の勢力とよんでいる」<sup>2)</sup>と解説されている。

その基本的特徴は、「①人間を全体的に理解する、②人間の直接的経験を重視する、③研究者もその場に共感的に関与する、④個人の独自性を中心におく、⑤過去や環境より価値や未来を重視する、⑥人間独自の特質、選択性、創造性、価値判断、自己実現を重視する、⑦人間の健康的で積極的な側面を強調する」（コーチン）などとし、「この立場の先駆者として、人間が主体的に決断しうる存在であることを強調したアドラーをあげることができる」<sup>2)</sup>という。

日本人間性心理学会は、「人間性を理解し、その回復と成長に貢献することを通じて、社会的に責任を果たしうる心理学の研究と実践を推進すること」<sup>3)</sup>を目的としている（1982年7月11日発足）。

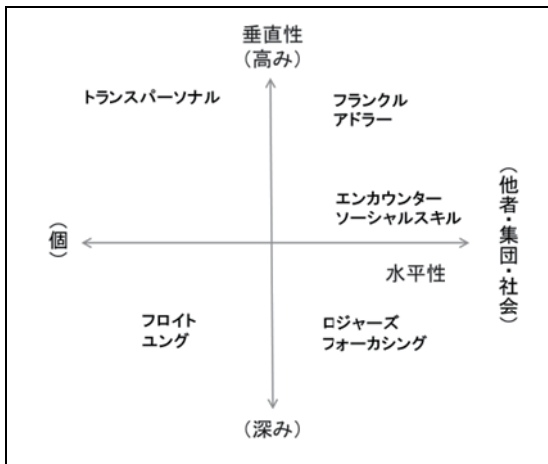
また、アメリカ心理学会人間性心理学部会（第32部会）では、同部会および人間性心理学を次のように定義している。

「本部会は人間性心理学の集合を代表するもので、そこには初期マズロー派、ロジャーズ派、トランスパーソナルおよび実存主義的立場だけでなく、近年発展中の立場である現象学的、解釈学的、構成主義的、フェミニスト的、そしてポストモダンの（社会構成主義的）な心理学を含んでいる。

我々は長期にわたって、すべての人々が幸福（ウェルビーイング）であること、目的と意味のある人生が重要であることに関心をもってきた。人間性心理学は、ポジティブ心理学のここ近年の動きと同類あるいはその基礎に位置づけられる。

人間性心理学は人間の経験の全範囲に誠実であることを目指している。その基礎には哲学的な人間主義や実存主義、現象学が含まれている。科学および専門職としての心理学において、人間性心理学は、人間存在を研究する体系的で厳密な方法を開発し、より包括的で統合的なアプローチを通じて、現代心理学の断片的な性質を正すことを目指している。」<sup>4)</sup>

中野は、『人間性心理学入門』<sup>5)</sup>の中で、人間性心理学の領域で活躍してきた7人の人物を取り上げている。すなわち、アブラハム・マズロー、ヴィクトール・フランクル、ロロ・メイ、カール・ロジャーズ、フレデリック・パールズ、エリック・バーン、ユージン・ジェンドリンである。また、「人間性心理学の源流を求めて」をサブタイトルとして、『マズロー心理学入門』<sup>6)</sup>を紹介している。一般には、行動主義心理学を第一勢力、精神分析を第二勢力とし、20世紀中葉のアメリカにおいて展開された第三勢力の心理学が人間性心理学とされる。この新たな潮流を生み出した中心的な人物の一人はマズローであり、その意味では間違いなく、現代の人間性心理学の源流はマズロー心理学といえる。



出典：諸富祥彦『教師の自己成長と教育カウンセリング』<sup>7)</sup>

図1 自己成長（人格形成）における2つの次元と心理学の位置づけ

また、諸富は、人間の自己成長を、横軸（水平性）と縦軸（垂直性）の二つの軸で説明している（図1）<sup>7)</sup>。横軸とは、「他者とのつながり（関係性）、あるいは学校や企業など組織・集団、地域などのコミュニティとのつながり」をさし、これを「水平性の次元」という。縦軸には、「自己を深く見つめる『深み』の次元と、自身の人格を高めていく『高みの次元』」があり、これを「垂直の次元」という。そして、特に、「自己成長を促す心理学」の礎として、マズロー（人間性心理学と自己成長）、アドラー（共同体感覚と自己選択）、フランクル（生きる意味の心理学）を採り上げている。

### Ⅲ マズロー心理学：人間性心理学の源流

#### 1. 欲求階層説

マズロー心理学といえば、最も有名なものの一つが「マズローの五段階欲求」であろう。「欲求階層説」の理論自体は、1954年に世に出た著作『人間性の心理学（動機と人格）』に収録されていたという<sup>8)</sup>。しかし、この「五段階欲求」という語も、これとほぼセットで登場する「ピラミッド図」（図2）<sup>9)</sup>も、マズロー自身の著作にはないことは意外ともいえる。

「五つの欲求」とは、次のとおりである。

- ① 生理的欲求
- ② 安全と安定の欲求
- ③ 所属と愛の欲求
- ④ 承認と自尊心の欲求
- ⑤ 自己実現の欲求

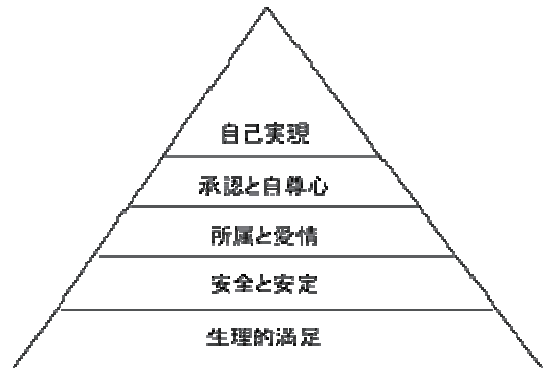


図2 マズローの欲求階層説<sup>9)</sup>

このピラミッド型の階層の基底（第一）層には、生理的欲求があり、これが満たされると安全と安定を求める欲求が生じ、これも充足されると次の第三層へと進んでいくという。マズローは、第一層から第四層までを欠乏欲求と名づけ、上位の欲求は、下位の欲求がたとえ部分的にせよ満たされて初めて満たされると考えた。欠乏欲求がすべて充足されると、第五層にある高次欲求である自己実現欲求が生じるという。ただし、人間の本性として、たとえ「生理的欲求」や「安全の欲求」が充足されていなくとも、「自己実現」の生き方を選択することがあることも事実である。親の子どもに対する犠牲的な愛、すなわち、時には危険を冒してまでも子どもの生命・心身を守ろうとする態度や行動は、その典型的な例といえるだろう。

## 2. 自己実現論

マズローの自己実現は、自らの内にある可能性を実現して自分の使命を達成し、人格内の一致・統合をめざすことをさす。健康的な人間は、成長欲求により自己実現に向かうように動機づけられている。そして、この自己実現は、自己の成長や創造的な活動と関連した、いわば最も人間らしい欲求であることは間違いない。しかし、この欲求を完全に達成できる人はごく限られている。そこで、むしろ自己実現を追求する志向性の有無が重視されている。自己実現を達成した人の特徴は（表1）<sup>10)</sup>のとおりである。

表1 自己実現者に共通する特徴<sup>10)</sup>

1. 現実をより有効に知覚し、それとより快適な関係を保つこと
2. 受容（自己、他者、自然）—あるがままに受け入れる態度
3. 自発性、単純さ、自然さ
4. 課題中心的
5. 超越性・プライバシーの欲求
6. 自律性・文化や環境からの独立、意志、能動的人間
7. 認識が絶えず新鮮であること
8. 神秘的経験・至高体験
9. 共同社会感情（共同体感覚）
10. 心の広い、深い対人関係

11. 民主的性格構造
12. 手段と目的の区別、善悪の区別
13. 哲学的で悪意のないユーモアのセンス
14. 創造性
15. 文化に組み込まれることに対する抵抗、文化の超越

マズローは、「自己実現している人々について直接調べてみると、（中略）彼らが献身的な人々であつて、『自己の外部』の何らかの仕事、職業、業務、あるいは愛すべき職務に身を捧げていることに気がつく」と述べている<sup>11)</sup>。また、健康な人格を有する人々は、自由な選択の中で、「B 価値」を選ぶ傾向にあるという<sup>12)</sup>。「B 価値」とは、「人間にとっての究極的かつ本質的な価値であり、もうそれ以上は分析できないものとして私たちが知覚するもの」<sup>13)</sup>をさし、「真、善、美、全（二分の超越）、生气、独自性、完全（必然性）、完結、正義、完結、豊かさ、遊戯性、無努力、自足性」<sup>14)</sup>をいう。

ちなみに、ユングは、「自己実現」よりも、これと同義の「個性化」という用語を多く用いている。彼は、「個性化」を「我々が自己自身になることである」と定義し、「生命はすべて個性化へ向かう本能をもつ」といい、「自己実現の過程においては、無意識からのメッセージを受け取ることが重要であるとする」<sup>15)</sup>。この過程の光に満ちた部分だけでなく、これまでの均衡を失うという危機的側面（闇の側面もあること）も指摘していることに注意を払う必要があるだろう。

## 3. ユーサイキアン・マネジメント

マズローによれば、「すべての人が心理学的に健康であるような心理学的なユートピアの状態、これをユーサイキアと呼ぶ」という<sup>16)</sup>。ユーサイキアは、「優心社会（上田吉一）」や「よい心の状態（金井壽宏）」などと訳されることもあるが、つまり、「世の中が自己実現者ばかりで、その際に実現するであろう理想の文化や社会」を意味する。そして、マズローは、シナジーを中心に据えた企業経営を「ユーサイキアン・マネジメント」（進歩的な経営管理）と命名した。シナジーは、一般的に相乗効果を意味するが、マズローは、ルース・ベネディクトによるシナジーの概念をもとにしているという。そもそも、シ

ナジーは、「原始的文化の健康度を示す言葉」であり、「シナジーが高いほどその文化は健康的で、シナジーが低いほど不健康な文化」と定義される<sup>17)</sup>。ベネディクトによれば、「ロー・シナジー文化での社会機構は、その利害が相互に相反し、衝突するような行為をもたらし、ハイ・シナジー文化では、相互の利益がさらに増すような行為をもたらす社会機構になっている」<sup>18)</sup>という。

そして、マズローは、次のように述べる。

「シナジーの備わった社会制度の下では、利己的な目的を追求することが必然的に他人を助けることにつながり、また愛他的・利他的で他人を助けようとする行動が、自ずとそして必然的に自分自身にも利益をもたらすということである。」<sup>19)</sup> これは、「利己主義と利他主義の二分法が解消されるということ」であり、個人と他者との共存共栄、共同体における調和的発展ということができよう。

## IV 人間性心理学のさらなる源流について

### 1. 短い歴史と長い過去

心理学の歴史は短い、心理学の過去は長いといわれる。「19世紀後半のドイツと、これにならったアメリカを中心に、相次いで実験心理学の研究室が開設されて以来、それ以前を『長い過去』とよび、実験心理学という形をとった科学的心理学の短い歴史のみを学問としての心理学の歴史とする学史観が形づくられた」<sup>19)</sup>のである。しかし、人間性の理想を追求するという意味では、実験心理学以前の人文科学（哲学・思想・宗教等）も、心理学の重要な源流と考えてよいであろう。最も古い心理学の書は、アリストテレスの『心とは何か』（靈魂論）<sup>20)</sup>であるといわれる。彼は、身体（＝質料）の営みを通して、靈魂（＝形相）の本質を明らかにすることを試みたのである。

### 2. 古代ギリシャ哲学とヘブライズム

既往研究の代表として、村本は<sup>20)</sup>、人間性心理学について、「その思想的源泉も多様で、かつしばしば複雑に絡み合い、その緊張がまた既存の思想を新たに展開させてきた」という。そして、思想史を通覧するかたちで、「古代ギリシャ哲学」と「ヘブライの一神教」を人間性心理学の源流に挙げている。すなわち、次のとおりである。

「マズローをはじめとして人間性心理学の旗印といえる自己実現や価値志向性、目的論の思想は、古代ギリシャにおける自然の概念に遡る。そこでの自然とは、近代自然科学における概念規定と違い、他の何かによってではなく、それ自身において存在し、活動し、潜在するある目的に向かって運動するものことである。アリストテレスによれば、人間を含めて自然に存在するものは、命のないもの、植物、動物、人間とでその存在の原理が異なるとはいえず、皆、可能態から現実態に向かう傾向にある。彼は物事の原因として質料、効果、形相の他にさらに、その運動の終わりを意味する目的を加えた。」<sup>21)</sup>

「人間性心理学のもうひとつの重要な思想的源泉は、ヘブライの一神教（ユダヤ教とキリスト教）である。ギリシャ思想と違い、そこでは人間は、それ自身においてではなく、あくまで創造主である神との契約関係に基づきながら、神からの人間に対する愛を他者との人間関係（愛、思いやり、やさしさ、利他主義、苦しみの意味、正義の探求など）という生活実践において具現化することを求められている。ヘブライズムは本質的に『関係性』の思想である。」<sup>22)</sup>

戦後日本の教育改革において、人間性を回復し、その理想を確立するために、南原繁は、ルネッサンスと宗教改革が必須である旨を主張した<sup>24)</sup>。ルネッサンスは、古代ギリシャ精神の復興であり、宗教改革は、原始キリスト教に復帰しようとする運動であり、いずれも原点回帰および精神復興といった志向である。人間性心理学の源流は、まさに、その古代ギリシャ哲学とヘブライズム（ユダヤ・キリスト教）であるという点は非常に興味深いといえる。

### 3. 健康と正義という観点からの考察

マズローは、その著作『完全なる人間』の「緒言・健康の心理学」<sup>25)</sup>の中で、「人間の本性は善である」「本性に逆らえば病気になる」と述べている。すなわち、「病的な文化が病的な人間をつくり、健康な文化が健康な人びとをつくる」、「個人の健康の改善は、よい社会をつくる第一歩である」というのである。

このことと密接に関連する内容が、実に、プラトンの『国家』の中で、ソクラテスとグラウコンの対話として議論されており、次に引用する<sup>26)</sup>。

「健康的なものは健康をつくり出し、病氣的なも

のは病氣をつくり出すはずだ」(ソクラテス)

「ええ」(グラウコン)

「他方また、正しいことをすることは<正義>をつくり出し、不正なことをすることは<不正>をつくり出すのではないかね」

「必然的にそういうことになります」

「しかるに、健康をつくり出すということは、身体の中の諸要素を、自然本来のあり方に従って互いに統御し統御されるような状態に落ち着かせることであり、他方、病氣を生じさせるとは、それらの要素が自然本来のあり方に反した仕方で互いに支配し支配されるような状態をつくり出すことにほかならない」

「たしかにそうです」

「他方また」とぼく(ソクラテス)は言った、「<正義>をつくり出すということは、魂のなかの諸部分を、自然本来のあり方に従って互いに統御し統御されるような状態に落ち着かせることであり、<不正>をつくり出すとは、それらの部分が自然本来のあり方に反した仕方で互いに支配し支配されるような状態をつくり出すことではないかね」

「まさしくそうです」と彼(グラウコン)。

「してみると、どうやら、徳とは魂の健康にあたるものであり、美しさであり、壮健さであるということになり、悪徳とはその病氣であり、醜さであり、虚弱さであるということになるようだ」。

このことは、現代におけるWHOの健康の定義「健康とは、病氣でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべて満たされた状態にあること」にも通じる。また、自然本来の法則に合致する生き方をするか否かが、健康になるか病気になるかに大きく影響を与えるという考えは、現代の医学にも通じる。そして、前述の村本とは異なる観点——「健康と正義」という視点からも、人間性心理学の源流の一つは、古代ギリシャのプラトン哲学に遡ることができるといえるだろう。

## V 最後に

人間性とは、平たく言えば「人間らしさ」ということであり、「神性」「仏性」でもなければ、「獣性」

「動物性」とも違う性質である。現代の脳科学からすれば、前頭前野の働きである「思考」や「創造性」が、人間の最も典型的な特徴の一つともいえるが、あたかも神のような「完全性」を追求する側面もあれば、大脳辺縁系の一部である扁桃体が司る動物的な生存本能や感情の部分が本質でもあるといえる。

カントは、『道徳形而上学の基礎づけ』の中で、「君は、みずからの人格と他のすべての人格のうち存在する人間性を、いつでも、同時に目的として使用しなければならず、いかなる場合にもたんに手段として使用してはならない。」<sup>27)</sup>と述べたが、和辻哲郎は、「人格と人類性」<sup>28)</sup>という言葉を用いて議論を展開させた。アリストテレスを待つまでもなく、人間の特徴、すなわち、人間性は、社会(ポリス)的存在であるということでもある。個人の自己実現(個性化の達成)もさることながら、共同体の一員としてのユースアイキアン・マネジメント、すなわち、完全なる経営というものを求める側面も有する。かつて、南原繁が学生たちに訴えた「個性の完成」と「共同体の完成」<sup>29)</sup>に向けた調和的・持続的発展を目指し、私たちの意識改革からスタートすることが重要であると考え。また、人間の本性・徳性・卓越性や健康と正義に関する議論など、すでに古代ギリシャ哲学——プラトン哲学から考察されてきており、先人の知恵を土台に、現代における科学的・批判的思考を加え、新たな知見を積み重ねていくことも大切であろう。そして、「私たち一人ひとりの人生や、私たちの属する組織や社会のあり方が、本来あるべき正しい方向に向かう状態に注目し、そのような状態を構成する諸要素について科学的に検証・実証を試みる心理学」<sup>30)</sup>である「ポジティブ心理学」に期待が寄せられると考える。

### 【引用・参考文献】

- 1) 内閣府『Society5.0』  
[https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/index.html](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html) 2021年7月30日閲覧
- 2) 中島義明他(1999)『心理学辞典』有斐閣, p.660
- 3) 日本人間性心理学会「日本人間性心理学会とは」  
<https://www.jahp.org/> 2021年8月6日閲覧
- 4) The Society for Humanistic Psychology  
「About Us」

- <https://www.apadivisions.org/division-32/about> 2021年8月6日閲覧
- 5) 中野明 (2019) 『人間性心理学入門——マズローからジェンドリンへ』アルテ, p.188
- 6) 中野明 (2016) 『マズロー心理学入門——人間性心理学の源流を求めて』アルテ, p.188
- 7) 諸富祥彦 (2017) 『教師の自己成長と教育カウンセリング』図書文化, p.11-12
- 8) 前掲『マズロー心理学入門』p.33
- 9) 前掲『心理学辞典』p.868
- 10) A・H・マズロー (小口忠彦訳) (1987) 『[改訂新版] 人間性の心理学——モチベーションとパーソナリティ』産能大出版部, p.228-264
- 11) 前掲『マズロー心理学入門』p.88
- 12) アブラハム・H・マズロー (上田吉一訳) (1998) 『完全なる人間 [第2版] ——魂のめざすもの』誠信書房, p.214
- 13) 前掲『マズロー心理学入門』p.89
- 14) 同前 p.90
- 15) 前掲『心理学辞典』p.331
- 16) 前掲『マズロー心理学入門』p.140
- 17) 同前 p.146
- 18) 同前 p.148
- 19) 前掲『心理学辞典』p.458
- 20) アリストテレス (桑子敏雄訳) (1999) 『心とは何か』講談社学術文庫, pp.246
- 21) 村本詔司「人間性心理学の源流」(人間性心理学会編 (2012) 『人間性心理学ハンドブック』創元社, p.16-29
- 22) 同前 p.18-20
- 23) 同前 p.20-22
- 24) 南原繁「新日本文化の創造」(南原繁 (2007) 『新装版 文化と国家』東京大学出版会, p.5-17)
- 25) 前掲『完全なる人間』p.3-10
- 26) プラトン (藤沢令夫訳) (2008改) 『国家』岩波文庫, p.370-371
- 27) カント (中山元訳) 『道徳形而上学の基礎づけ』光文社古典新訳文庫, p.136
- 28) 和辻哲郎 (1962) 『人格と人類性』(和辻哲郎全集第九巻) 岩波書店, p.323
- 29) 南原繁「真理と個性」(前掲『新装版 文化と国家』p.49)
- 30) ポジティブ心理学協会『ポジティブ心理学とは』  
<https://www.jpapanetwork.org/what-is-positive-psychology> 2021年10月16日閲覧